

浅野 總一郎と横浜 ～「度胸と努力」の 83 年～

第三報告者 酒井晴雄

□はじめに (本日のテーマ)

- (1) 横浜発展の功労者の一人浅野總一郎について どのような貢献をしたのか? 情熱の背景?
- (2) 總一郎没後 95 年の今年、總一郎の生涯をふり返るとき何が見えて来るのか

1. 横浜の発展…人口集中・市域拡張 (横浜村から横浜市へ)

- (1) 人口増加の要因 市域外からの人口流入 横浜商人の対応 (産業投資なし) 都市整備の遅れ
- (2) 横浜を創り上げた「功労者」…一攫千金の夢を追って横浜に集まった人々
高島嘉右衛門 (インフラ整備) 早矢仕有的 (丸善書店) 原富太郎 (生糸貿易 三溪園)
- (3) 横浜の工業都市化 神戸港の追い上げ→工業地帯造成の必要性→浅野總一郎の登場

2. 臨海部の埋立事業

(1) 埋立構想

① 新航路決定・新造船発注のため米欧視察へ (明治 29.7~30.2)

② 各国港湾施設の充実 横浜港の遅れ→「世界的東京湾」建設構想 (壮大 独創性) 理解されず

(2) 鶴見・川崎臨海部の埋立…遠浅海岸 二大都市・東海道線 廣井勇の保証・安田善次郎の資金

(3) 埋立事業の経過

明治 32・43 東京府に「品川湾埋立」申請→不許可 (規模・予算、民間人不信)

明治 37 總一郎、県庁に「鶴見・川崎間埋立」申請→不許可

明治 41 山形要助に設計依頼 海面埋立 (150 万坪) 事業許可申請→不許可 (金融機関の保証)

明治 45 鶴見埋立組合設立 埋立計画再申請 日本鋼管(株)若尾新田に工場建設着工

大正 2 免許取得 鶴見川河口側 (第 7 地区) から工事開始→大正 4 年完成 一部を旭硝子に売却

大正 3 鶴見埋立組合→鶴見埋築(株)に 日本鋼管(株)操業開始

大正 5 第 6 地区着工し翌年 4 月完成 (株)横浜造船所 (浅野造船所) 進出

大正 6 町田村海岸部、浅野造船所進出→翌年、浅野製鉄所は造船所隣接地で原料鋼材提供

大正 9 鶴見埋築→東京湾埋立(株)に 不況下に経営規模拡大 埋立地の一般企業向け販売

大正 11 第 5 地区完成 一部を「安善町」に→大正 15 第 4 地区完成

大正 12 関東大震災 (埋立地の安全性・工事の優秀性証明) →東京方面から工場移転

昭和 2 東京湾埋立(株) 鶴見・川崎地区の全計画区域の埋立工事完了 (154 万坪)

昭和 3 計画面積 150 万坪の埋立事業完成 港湾機能完備 (防波堤、道路、橋など)

昭和 7 京浜運河 (水深 12m) 開設→臨海工業地域の完成 浅野埋立は臨海工業地帯建設のモデルに

昭和 12~ 臨海工業地帯の造成はすべて公営化

インフラの整備 鉄道敷設 (大正 13 鶴見臨港鉄道発足) 電力供給 (大正 6 落合発電所建設)

工業用水供給 (大正 10 橘樹水道株式会社設立)

☆総一郎「埋立は一種の廃物利用。自然の力で埋め立てられるべき性質のある場所に人工を施すのだから工事は極めて容易、工費も低廉」

3. 總一郎年譜…「常識」に挑み続けた破天荒な生涯

⑧破天荒=誰も出来なかったことを初めて行う

(1)「三つ子の魂」百まで…加賀の豪商銭屋五兵衛への憧れ

嘉永元 3 月 10 日 越中国氷見郡藪田村に誕生 家業 (医師) は姉夫婦 腕白だが利発な少年
6 歳氷見の町医者宮崎家養子に 14 歳養父の代診を勤めるがコレラで医者に限界感じ実家に遁走

15 歳 縮機・醬油醸造、稲扱機のレンタル業→失敗 (80 両の負債)

19 歳 豪農鎌仲家の婿養子に 産物会社、米の買付け→失敗 (3 年で離縁)

23 歳 浅野商店で再起 (偽手紙で資金) →高利で 300 両借り破産し出奔

《独自の経営哲学》商才あるが経営の才無し 奮闘努力・蓄財より事業 楽天性・積極性・先見性

(2)稼ぐに追いつく貧乏なし

明治4 上京後、夏は御茶ノ水で水売り 秋は横浜で小倉屋で奉公 冬は住吉町で竹皮屋開業

明治5 貸布団屋で働くサクと結婚 翌年からは薪・炭・石炭と商売拡張 寝る間も惜しんで働く

明治8 サクの病気、実弟の死、強盗被害、火災の不幸を乗り越え、寿町で石炭商再開

《危機管理能力》少ない元手と多くの労力 知恵と工夫（トレンド見抜く） 関連ある事業展開

(3)コークスと石炭で切り開かれた運命

①リサイクルビジネスの元祖…「廃物の利用を考えないのは日本人に研究心と欲がないから」

○コークス 横浜瓦斯局のコークスを深川セメント工場に売込んで巨利

* 船運送の非効率・隅田川の水運 NW→浅野回漕部・東洋汽船の発想に

* 王子抄紙部 コークスと交換に石炭納入→渋沢栄一の知遇を得る

○コールタール 瓦斯局のコールタール買取り→コレラ消毒薬原料として販売して奇利

○公同便所（後に共同便所） 横浜市内に 63ヶ所建設 糞尿は肥料として販売（年間 2,400 円）

②渋沢栄一との出会い…明治9年の春 抄紙会社の石炭搬入をきっかけに

○「腕で飯を食う心掛けが肝心」⇔「努力と度胸」「稼ぐに追いつく貧乏なし」

○公益の追及が利益を生む⇔廃物で利益を上げながら社会問題も解。

(4)実業家から大実業家へ

①總一郎の事業展開

○石炭・コークス・コールタール・糞尿販売継続し資金的余力→明治16年頃から多くの事業に

○原点は“白”（セメント）と“黒”（石炭）

②セメント業 明治17年深川セメント工場払下げ（渋沢らの支援）→「浅野セメント」

○「国内の石炭と粘土で焼けるセメントは国を利する」→三井（倉庫）・三菱（別荘）に競り勝つ

○夫婦で工場内に住み早朝から深夜まで働く（生命より仕事）

* 「1日4時間以上寝ると馬鹿になる」 勤勉力行 経費節減 信賞必罰 積立金制度

* 「常識」との戦い 政府がやっても見込みがつかない事業 繊維紡績への誘い

③炭鉱開発・鉄道業「日本の富は山から掘り出すか、海から掬うか、外国から持ってくるしかない」

④水力発電・石油事業 エネルギー産業で石炭と同系列

⑤海運業 石炭販売の経験で重要性認識 日本郵船の独占を排し輸送コスト削減

明治19 浅野回漕部開設 明治29 東洋汽船株式会社設

4. 總一郎と地域貢献

(1)渋沢栄一の浅野評

暴虎馮河の人ではない（先見の明ある人 見積もりが敏捷明確）利他より自富の人

学問が無い人（上京時の精神が支配 「修身齐家」→「治国平天下」とはならない人）

(2)専門家・地域の浅野評

二流経済人 士魂なく商才のみ 粉塵で特産の桃打撃 漁業関係者の反対

浅野流（金銭解決）地元対策を経験 地元有力者を交渉に 早急補償 多額寄付 関係者村会に

⇔浅野翁寿像建立 大正13年喜寿の祝い 25万人の寄付金で

(3)總一郎の地域貢献

①公営埋立事業の促進

昭和3 横浜市 子安・生麦地先埋立開始→〃11完成

昭和4 神奈川県 潮田地先埋立開始→〃7完成

②教育的貢献 大正9年浅野綜合中学校創立

- 總一郎求める人間像 「腕で飯を食う人間」「働く人間」→事業に適する実際的教育
 - * 有力なる職工頭（フオーマン）の育成 教養主義に陥らず広い知識と実践的指導力
 - * 綜合教育 科学技術教育 実用的語学教育 体育励行 共同生活
- ゲーリーシステム（実践教育・勤労主義）の採用
 - * ゲーリー市 ミシガン湖畔の鉄鋼業都市 世界中から移民集中
勉強・運動遊戯・工場労働→自律的市民育成
⇨全国から人が集まる京浜臨海部との共通性
 - * 水崎基一（初代校長）派遣し教育事情調査

□おわりに

- (1) 總一郎の「廃物利用」の知恵、「総合的開発」の視点は、横浜の明日を考えるうえで、大切なヒントになるのでは？
- (2) 「川崎・鶴見はわしの池、浅野の庭じゃ。今に太平洋をうめたてて鉄道でアメリカまで行けるよ
うにしてみせる」大きな夢を語りその実現に情熱を傾けた總一郎の生涯。なんとなく息苦しさを
感じる昨今。各世代の生きるヒントになるのでは？
- (3) 浅野は二流財閥、二流経営者という研究者の評価がある。「渋沢には士魂商才があるが、浅野には
士魂なく商才のみ」とまで断言する人も…
その名を冠した財閥や企業はないが、浅野埋立が小規模に終わっていたら現在の京浜地区はど
うなっていたのか？いまも地域に貢献する多くの人材を世に送り続ける学校を残した總一郎。
總一郎晩年の、この二つの事業をどう評価するのか？

☆この報告が、横浜発展の功労者について学ぶことは「ヨコハマの魅力」をもっと知るきっかけになるのだということを理解する一助になれば幸いです。

【参考資料】

『浅野總一郎一代記絵伝』『浅野總一郎』（浅野泰治郎）『浅野学園各周年記念誌』
『浅野学園百年史』『鶴見区史』『東京湾埋立物語』『東亜建設社史』『浅野セメント沿革史』
『鶴見ゆかりの人物誌』（齋藤美枝）『鶴見・潮田歴史散歩』（瀬田秀人）『横濱』（Vol75）
『浅野総一郎～京浜工業地帯の父』（長田格）『原三溪と関東大震災』（小林照夫）その他